

ウクライナ戦争を終らせる方法

How the War in Ukraine Can Be Ended

<https://www.currentaffairs.org/2022/05/how-the-war-in-ukraine-can-be-ended>

Anatol Lieven

第一部

Q: ウクライナ戦争の知られざる側面は？

まず、ウクライナ戦争に関する主流の議論にはバイアスがかかっています。本日は特に、アメリカ人にとって一般に知られていない、しかし最も重要な事実について教えてください。

リーベン：

まず第一に、ウクライナへの侵攻は、決して容認できるものではないということです。それは明らかに完全に違法であり、完全に間違っており、悲惨なものでした。

国際関係の専門家、ハンス・モーゲンソーは、「政治家の基本的な任務の1つは、研究を通じて相手の立場に立つ能力を養うことである」と言いました。彼はそれを「戦略的共感」(strategic empathy)と呼んでいます。

それは、必ずしも相手に同意したり、共感したりすることではありません。端的に、「相手が自国の死活的利益として何を考えているか」を理解することです。そして、その理解に基づいて2つのことをするためです。

1. ある状況下で彼らがどのように行動するかを予測すること

2. 「それが彼らの死活的利益であるなら、わが国の死活的利益は何か、どこで妥協できるのか」ということを考えること

アメリカでは、4人の元駐モスクワ大使がこのことを語っています。4人とは、ジョージ・ケナン、トーマス・ピッカリング、ジャック・マトロック、そして現在のCIA長官であるウィリアム・バーンズです。

彼らの発言にもかかわらず、このことが十分に理解されていなかったと私は思います。

彼らは皆、こう考えていました。

1. 「ロシア人（プーチンだけではなく、エリツィン政権以来のすべてのロシア政府）が、ウクライナを敵対的な西側同盟に引き入れることは、レッドラインを越えることになる」

2. 「そうなれば、彼らは非常に厳しく反応するだろう」

私も、1990年代にロシアに駐在した英国人記者として、そのような発言を耳にしました。

つまり「NATOのウクライナへの拡大は戦争につながる」という警告が当初からなされていたのです。

これには、歴史的、文化的、そして経済的な理由があります。そのようなもろもろの理由が、ロシアの国民文化的な背景となり、ロシアの行動に非合理的な要素を加えているのだと思います。

その上で、「**ロシア側にも一理ないわけではない**」ということ、認識しなければなりません。

たとえば、ロシアが、中国がメキシコやカナダを中国の軍事同盟に取り込もうとしたらアメリカが反応するでしょうか。それが「モンロー・ドクトリン」です。ロシアの体制は、自分たちが非常に守勢に立たされていると感じています。

多くの人たちは、いまロシアが攻勢に転じたと見ています。もちろん、ウクライナではそうですが、**彼らの目からすればロシアはこの30年間、戦略的に守勢に回って来たのです。**

ウクライナとグルジアが NATO に加盟することは、ロシアを歴史的な海軍基地であるセヴァストポリから追い出すことを意味します。ロシアが伝統的に足がかりとしてきた係争地からロシアを追い出すことを意味すると、彼らは考えています。

以上が第一の論点、これまで議論されてこなかった論点です。

2つ目の論点、これが私が本当に言いたいことです。

ウクライナにおけるロシアの最初の計画は、明らかに、ウクライナ政府を転覆させ、国全体を従属させようとするものでした。そして**ロシアは敗北し、完全に失敗したのです。**

その結果ロシアは、その代わりにウクライナ東部でより多くの領土を手に入れるか、2014年以來保有しているロシアの領土をウクライナ人と欧米に認めさせるか、という目標にその野心を縮小させたのです。

つまり、我々の後ろ盾を得たウクライナ人はすでに勝利したのです。そしてそのことが、和平の妥協の可能性を生んでいると思います。ロシアは和平と妥協を望んでいるはずで、ロシアが被った莫大な損失を考えると、その可能性はかなり高いと思います。

しかし、**私たちやウクライナ人も和平と妥協を望まなければならない**と思います。

その結果、ウクライナは2014年に失ったもの以上を犠牲にすることなく、確保することができると思います。

Q: **ロシアは NATO とこの戦争をどう考えているか？**

停戦に向かうためには、ロシアの視点から物事を理解する必要があるというのが、最初のポイントですね。

ロシアの視点に同調したり、正当化したりするためではなく、彼らが何をどうしたいのか、私たちのすることにどう反応しようとしているのかを把握するために、その作業が必要です。

第二のポイントですが、ウクライナの「勝利」を助ける必要があるとか、「プーチンに勝利を与えない」ことが重要であるとかいう話は、少し誤解を招きやすいと思います

それぞれのポイントについて詳しく説明しましょう。

まず1点目は、ロシアの視点から物事を理解することです。私がよく耳にするのは、次のようなバリエーションです。

「しかし、NATOは防衛的な同盟です。それはロシアの脅威から自国を守るために各国が自由に参加することを選んだ同盟です。

現にロシアは明白な脅威であり、今回の侵攻で証明されたんじゃないですか。

NATOがロシアの安全を犯したという人に聞きたい。NATOがロシアを脅かす可能性はどこにあるのですか」

リーベンさん、プーチンのいう「NATOの脅威」とは、どのようなものなのか教えてください。

リーベン

それでは、もう一度モンロー・ドクトリンの話に戻しましょう。

リンカーン大統領の有名な言葉ですが、「国際的軍事勢力が中央アメリカ経由で米国に侵攻できたことなど、これまで一度もなかった」

「ニカラグアのバナナ箱に潜り込んだソ連軍」というような偏執狂的なおとぎ話を信じない限りはそのとおりです。そのような可能性が出てきた場合、米国は極めて冷酷無惨に対応するでしょう。

だから質問は、「なぜロシアはアメリカより偏執狂的でないのか」と問われねばなりません。

第二に、ロシアは NATO の東欧への拡張を好まなかったが、平和的に受け入れました。それに反応して東欧を不安定化させようとしたり、ましてや東欧を侵略しようとしたりすることはなかったのです。

重要な歴史的事実、帝国が崩壊するときには、紛争が残るということです。思い起こしてください。中南米でスペイン帝国が崩壊したとき、どれだけの紛争と戦争が残ったか。

イギリスはこれを無視することができた。なぜなら彼らは、海の向こうの自分の国に帰ったからです。しかし、彼らが出ていったあとにカシミール、バングラデシュ、ビアフラに戦争の火種は残していったのです。

フランスは、アルジェリアにフランス人入植者を送り込んだので、もっとひどいことになりました。

オランダやベルギーはもちろん、トルコやロシアのような陸の帝国は、その結果、国境で問題が発生しています。

旧ソ連の連邦内国家だったところでは、独特の問題が生じています。その典型がバルト三国です。問題のポイントは、それまで住み続けてきたロシア人の処遇が宙ぶらりんになることです。

私はジャーナリストとしてバルト三国の現地にいたのですが、ラトビアとエストニアは、「ロシア人の言語的、文化的、政治的権利を尊重する」という独立時の約束を完全に破ってしまいました。その際、NATO はバルト三国がロシア人の権利を奪うための引き金になった可能性があります。

ウクライナの場合、NATO に接近するということは、ある段階でロシアにセヴァストポリを放棄するよう要求することを意味していました。セヴァストポリ海軍基地はロシアにとって死活的意味を持ちます。セヴァストポリを放棄することは黒海を放棄し、地中海におけるロシアの影響力を放棄することになるのです。

グルジアの NATO 加盟問題は、より挑発的です。これはプーチン政権より前、1990 年代にグルジアに反抗したアブハジアと南オセチアを力づくで奪

還するために、NATO がグルジアを支援しようとした行動です。これはロシアへの明らかな挑戦でした。

コーカサスに NATO があれば、中央アジアにおけるアメリカの影響力が拡大し、そこでのロシアの影響力を明らかに脅かすことになります。

また、ロシアは 2 つのことを非常に心配しなければなりません。

1 つは、イスラム過激派です。もう 1 つは、カザフスタン国内における少数民族であるロシア人に向けられた、カザフ民族のナショナリズムです。カザフスタンが反ロシアの流れに巻き込まれれば、非常に厄介な問題になります。

これらはすべて、ロシア国家にとって憂慮すべきことなのです。

Q：「ロシアを弱体化させる」という米国の言い分

先月あたりから米国の姿勢とかレトリックがちょっとエスカレートしました。

バイデン政権は次のようなことを言い始めました。私たちはロシアを弱体化させて、二度と侵略ができないようにすると...

これは、ウクライナから彼らを追放する以上のことを意味します。文字通りに受け止めれば、ロシアが二度と国を侵略することができないようにするという考えは、ロシアを軍事力として永久に破壊することを意味します。

これは、ほとんど無益でかつ危険な計画ではないでしょうか。

リーベン：

3 ヶ月も経ったのに、ロシアはドンバス全体を占領することすらできません。この 2 ヶ月でロシア軍の評判はズタズタになりました。

私は第一次チェチェン戦争でこれを目撃しました。ロシア軍によって残虐行為が行われ、これらはプーチン政権の態度に起因すると思います。兵士は上からの命令で大規模な残虐行為を犯す可能性があります。

しかし、プーチン政権が人々に冷蔵庫と略奪品を盗むように命じているとは考えられません。それは残虐行為とは明らかに異なります。彼らが食料を略奪しているのなら、それは彼らの供給状況がとても悪いからであり、軍として崩壊しつつあることを示しています。それも一種の敗北です。

正確な死傷者数は不明ですが、殺された将官の数は確かです。またロシアの装甲部隊が受けた甚大な損害の写真を見ることができます。

ロシアは次にはフィンランドに侵略するなどと言われていますが、それはばかげた話です。ロシア人はどこにでも侵攻する 遺伝子があるというのでしょうか？

Q： スウェーデンとフィンランドが NATO 加盟を熱望する理由

スウェーデンとフィンランドが突然 NATO への加盟を熱望しはじめた理由は何でしょうか？

ヨーロッパ人の反応には理解し難いところがあります。人々がこのように言うのは、本心からなののでしょうか？

自国の国境から数マイル入ったところで崩壊したロシア軍が、ヨーロッパの他の地域に脅威を与える事ができるのでしょうか？

もしヨーロッパの指導者たちが実際にはロシアの侵略の脅威を感じていないとしたら、もっと米軍を配置し、もっと多くの国を NATO に加盟させるという必要性が突然湧いて来た理由は一体何なのでしょう？

リーベン：

理由は二つあります。

一つは、ロシアが攻めてくる可能性のあるバルト三国の将来に対する懸念です。

しかし、ロシアはバルト諸国を侵略すると脅してはいません。また、ロシアがウクライナで被った損失を考えれば、彼らはそのような新しい戦線を開きたいとは思わないでしょう。

第二に、スウェーデン人とフィンランド人は、ヨーロッパ人一般と同様に、ヨーロッパという国際規範の世界に生きていたいと願っているからです。たしかにその考え（「ただ乗り論」への懸念？）は理解できますが...

しかし、ロシアはEUにもNATOにも属しておらず、のけ者にされていると感じています。2国の判断に関しては、どちらがより危険かという問題です。答えは自明でしょう。

（以下次号に続く）